蘇東坡との詩の応酬

元豊七年(一〇八四) 八月、金陵(今の江蘇省南京市)での作。「荊公」は王安石(一〇二一～一〇八六)のこと。蘇軾は汝州に赴く旅次、金陵に立ち寄り王安石を訪問した。蘇軾は王安石の「北山」の詩の各詩に次韻した。

次荊公韻四絶 其二

宋・蘇軾

斫竹穿花破緑苔　竹を斫り 花を穿ち 緑苔を破る
小詩端爲覓榿栽　小詩 端に榿栽を覓めんが為めなり
細看造物初無物　細やかに造物を看るに 初め物無し
春到江南花自開　春 江南に到れば 花 自ら開く

○**斫**…たち切る。○**穿花**…穿はうがつ、ほる。ここは花を掘り去ってしまうこと。○**小詩**…絶句をいうことがある。短詩だからである。ここでは王安石の作った絶句を指す。○**覓榿栽**…榿ははんのき。栽はわかぎ、苗木。杜甫に絶句「何十一少府邕に憑みて榿木の栽を覓む」があり、「聞く飽けり 榿木三年にして大なりと、与に致せ 渓辺十畝の陰を」とはんのきの苗をねだっている。杜甫は浣花渓のほとりに栽えんとしてこの木を求めた。従って蘇軾の詩句は、浣花草堂の如き草堂を営んで静穏なる日々を送らんとなさるのであろうの意を含む。○**細看一句**…造物は万物の創造。郭象の「南華真経(荘子)の序」に「上は造物の物無きを知り、下は物の自ら造る有るを知る」とある。一句は細かにものの理を推してみると、造物者は決して意あって物を造り、物に変化を与えるのではない、すべて自然の妙用であるの意。○**江南**…長江の南。金陵は江南にある。

竹を伐り花を掘り取り、みどりの苔も取り払った。あなたの短詩はほかでもないはんのきの苗をねだろうとなさるのでしょう。よくよく見れば、万物の創造者は決して心あって物を作ったのではなかった。春が江南にやってくれば、花は自然に開くのだ。

次荊公韻四絶 其三

宋・蘇軾

騎驢渺渺入荒陂　驢に騎って 渺々として 荒陂に入る
想見先生未病時　想見す 先生の未だ病まざりし時を
勸我試求三畝宅　我に勧めて 試みに三畝の宅を求めしむ
從公已覺十年遲　公に従うこと 已に十年遅きを覚ゆ

○**騎驢**…驢はロバ。正式の官吏の外出には馬に騎るのが例であった。ロバに騎るのは官吏としてではなく、旅行者などであることの表示である。○**渺渺**…はるかなさま。王安石の住居は町から約五キロ離れていた。○**荒陂**…荒は荒廃、ひとけのないさま。陂は池、堀あるいは沼。○**想見**…或る人や情景などを想い、目にえがくこと。○**先生**…王安石をさす。蘇軾よりは先輩であった。○**未病時**…この年の春、王安石は大病をわずらい、神宗が特に侍医を派遣して診察させたほどであった。しかし蘇軾が訪問したころにはほぼ癒えていた。○**三畝宅**…畝は中国では約六・一四四アール。「五畝の宅」（『孟子』梁恵王篇上）と言いうのが古代の農民の宅地の標準的な広さだとすれば、三畝はごく手ぜまなものである。

南宋の藩淳の『藩子真詩話』に、この詩を引いて、「王安石は蘇軾に秦淮のあたりに家を見つけて住むようにすすめた」と記す。秦淮は今の南京市内を流れている川。○**従公**…公はさきの先生と同じく王安石をさす。従は、このような場合、或る人について学ぶこと。○**已覚十年遲**…現在ではもう十年も遅いと感ずる。つまり十年前であったらよかったの意。この句は王安石の学問の深さについての蘇軾の敬慕の情を述べると同時に、二人の立揚が今やすっかり違ってしまっていて、もはや同じ路を歩むことができなくなっているのをなげくのである。

口バにまたがって、荒廃した沼地の中を、ひとりはるばるとゆく。その目にあざやかに浮かぶのは、王安石先生、あなたのまだ健やかであられたころの（たぶんこの道を逍遥されたであろう）おすがたです。あなたは、この近くにささやかな家をさがしてみてはと、おすすめ下さいました。私もつくづくと思います。おそば近くにいてお教えをうけたまわるのが、せめてもう十年も早かったら、ああ、どんなにかよかったろうに。

「蘇東坡詩選」小川・山本より抄出